

# 立正大学図書館所蔵 河口慧海将来文献の研究(1)

——梵文『華嚴經入法界品』写本の翻刻と対校(1)——

庄 司 史 生

## 1 「河口写本」の再発見とその意義

本稿は、河口慧海（1866–1945）氏が第1回入蔵時の帰路、1903年にネパールにて Chandra Shamsher Jang Bahadur Rana（1863–1929）より寄贈され、日本に将来された梵文『華嚴經入法界品（*Gaṇḍavyūha*）』写本（以下、「河口写本」）の翻刻研究である。この「河口写本」は、1934年の時点ですでに所在不明となっていたが<sup>1)</sup>、2009年に立正大学大崎図書館に所蔵されていた未整理資料の中から他の河口慧海旧蔵書とともに所蔵が確認されたものである<sup>2)</sup>。

この「河口写本」の冒頭部の翻刻は1908年に玉代勢法雲氏による「梵本華嚴經の研究」によってなされ<sup>3)</sup>、1909年には經典最終部の「普賢行願讚」の翻刻が泉芳環博士による「梵文普賢行願讚の研究」によってなされている<sup>4)</sup>。そして1928年、継続して翻刻を行っていた泉博士は全翻刻を完成させ、須佐晋龍氏によって20部あまりが複製され、未定稿本として関係者に配布された<sup>5)</sup>。この「泉本」は、正式に出版されたものではなかったが、この「泉本」に計6本の写本を校合させた校訂テキストが、鈴木大拙博士と泉芳環博士によって出版されている<sup>6)</sup>。この「鈴木本」には1934年から1936年にかけて出版された初版本（「鈴木旧本」）と、その行外に不足分を補足した1949年出版の改訂版（「鈴木新本」）の二種がある<sup>7)</sup>。1960年には、この「鈴木新本」に Baroda 写本を校合させ、「鈴木新本」の不足を補ったテキストが、Paraśurāma Lakshmaṇa Vaidya によって出版されている<sup>8)</sup>。いわゆる「Vaidya 本」である。

1965年には、長谷岡一也氏が「Vaidya 本 *Gaṇḍavyūha* について」において、「Vaidya 本」と「鈴木旧本」との対比を行い、「鈴木旧本」における脱文の存在を確認し、「Vaidya 本」刊行の意義を指摘された<sup>9)</sup>。

2013年、筆者は「立正大学大崎図書館所蔵・河口慧海請来梵文写本『ガンダ・ヴェーハ』に関する予備的調査報告」において、長谷岡氏が指摘された「鈴木旧本」における脱文の箇所について、同氏が使用していない「泉本」、そして「河口写本」の該当箇所の検証を行い、結果として「鈴木旧本」に見られた脱文二例を「泉本」は備えていること、さらに「河口写本」にも脱文がないことを確認した。このことは「泉本」はほぼ忠実に「河口写本」を謄写していたことを裏付けることになり、「鈴木本」に見られる脱文は、「泉本」から「鈴木本」へと活字化を

行う際に生じた編集上の誤りである可能性を指摘した。<sup>10)</sup>

ところで「河口写本」の再発見より以前から（1997年）、本経典の新たな校訂テキストの作成が試みられていた。<sup>11)</sup> その成果の一部を報告書としてまとめられた田村智淳氏によると、「Vaidya本」と「英国王立アジア協会所蔵写本（R）」とVaidyaによって用いられた「Baroda写本（B）」、そして「ケンブリッジ大学所蔵写本（CA）」とを比較した結果、「V本」と「RBCA写本」との間には異読が認められるという。<sup>12)</sup> 「Vaidya本」が依拠したテキストは「鈴木本」であり、その底本は「河口写本」となる。要するに、田村氏による研究成果によると、「河口写本」と「RBCA写本」とは別系統の伝承を受けるものである可能性が推定されるわけである。「河口写本」が再発見されたことにより、「鈴木本」の原典へと立ち返ることが可能となった。<sup>13)</sup> 「鈴木本」には注記がなく、全6本の写本を使用していながら、最終的に読みとして採用された写本が不明である。この点において、経典研究史上、重要な校訂テキストである「鈴木本」は致命的な問題点を含むものである。

本稿は、既刊の「泉本（I）」、「鈴木本（S）」、「Vaidya本（V）」、また先行研究によって明らかにされた成果に依拠しつつ、再発見された「河口写本（T）」の読みを加えるという方法で「鈴木本」の不足分を補い、また「RBCA写本」との異読を確認することで、現存する *Gaṇḍavyūha* 写本の系統分類における「河口写本」の位置付けを明らかにすることを目的とする。

本稿では、まず①「河口写本」に基づくこれまでの校訂テキストの出版について概観し、次に②「河口写本」冒頭部の翻刻を行い、さらに③先行研究によって明らかにされた諸写本間の異読について、「河口写本」を用いて検証する。

なお、「河口写本」の略号は従来の研究との連続性を保つために「T」と記すことを予め明記しておく。

## 2 「河口写本」に基づく校訂テキストの出版

*Gaṇḍavyūha* を含む梵文『華嚴経』写本に関する近年の研究成果について、既に詳細な報告・研究がなされている。<sup>14)</sup> ここでは「河口写本」の日本への将来から校訂テキストの出版までを、①「泉本」、②「鈴木本」、<sup>15)</sup> ③「Vaidya本」の出版に分け、特に「河口写本」と直接関係する①について記す。<sup>16)</sup> なお、「河口写本」は、ネパール紙、45×12.8cm、全401（+白紙1葉）の全402葉から成る。一葉に七行が記され、プラチャリタネワール体で筆写されている。本写本の基本的書誌については、既に他で言及している。<sup>17)</sup>

### 2.1 「河口写本」の将来から「泉本」の出版（1903～1928年）

「泉本」（略号I）：泉芳璟『*Gaṇḍa-vyūha*』[京都]（全1488p）1928年<sup>18)</sup>

概要：河口慧海氏による写本の将来後、高楠順次郎（1866－1945）博士と南條文雄（1849－

1927) 博士を介して本写本を借り受けた泉芳璟 (1884-1947) 博士、隈部慈明 (1881-1919) 氏、玉代勢法雲 (1881-1956) 氏によってその解読研究が進められ、最終的に泉博士が、1. 河口慧海氏将来写本 (1903年将来) の全謄写を成し遂げ、それを2. 京都帝国大学所蔵の榊亮三郎 (1872-1946) 博士将来紙写本と比較、さらに3. 榊博士による謄写本により校異を加え、他に4. Bendall 出版の *Śikṣāsamuccaya* 引用部分、そして5. 渡辺海旭氏校訂の普賢行願讃を比較し作成し公表した。<sup>19)</sup>

## 2.2 「鈴木本」(略号 S) の出版 (旧本1934~1936年、新本1949年)

「鈴木旧本」(略号 So) : Suzuki, Daisetz Teitaro & Idzumi, Hokei, *The Gandavyuha sutra (part I~IV)*, Kyoto: Sanskrit Buddhist Texts Pub. Society, 1934-36.

「鈴木新本」(略号 Sn) : Suzuki, Daisetz Teitaro & Idzumi, Hokei, *The Gandavyuha sutra (part I ~ IV)*, Kyoto: The Society for the Publication of Sacred Books of the World, New rev. ed., 1949.

概要 : 上記「泉本」に、鈴木大拙 (1870-1966) 博士が入手した1. フランス・国立公文書館所蔵の紙写本、1部 (1908年複製)、2. ロンドン・アジア王立協会所蔵の貝葉写本、1部 (1930年複製)、3. 4. ケンブリッジ大学所蔵の紙写本、2部 (1930年複製) を校合し、鈴木・泉両博士の共同編集として世界に先駆けて梵文 *Gaṇḍavyūha* の校訂テキストの初版本を公表した (1934-36年刊)<sup>21)</sup>。

なお、これには上記「鈴木旧本」において不備があった箇所について、行外に補足し作成した改訂本 (1949年刊)<sup>22)</sup>がある。ここでは1934-36年刊の初版本を「鈴木旧本」、1949年刊の改訂本を「鈴木新本」と記す。

## 2.3 「Vaidya 本」の出版 (1960年)

「Vaidya 本」(略号 V) : Vaidya, Paraśurāma Lakshmaṇa, *Gaṇḍavyūhasūtram (Buddhist Sanskrit Texts ; no. 5)*, Darbhanga : Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, 1960.

概要 : 上記の「鈴木新本」に、Paraśurāma Lakshmaṇa Vaidya は Baroda の東洋研究所所蔵の紙写本を校合させテキストを作成し、Buddhist Sanskrit Texts No.5として公表した。<sup>24)</sup>

## 3 「河口写本」冒頭部の翻刻

本稿で扱う範囲は、玉代勢法雲氏が扱った「帰敬序」<sup>25)</sup>を含む經典の冒頭部のみとする。ここでは「河口写本」の翻刻を記し、玉代勢法雲氏による読み (玉代勢 [1908a] : 略号 H)、「泉本」による読み (泉 [1928]) : 略号 I)、鈴木本による読み (鈴木 [1934-36/1949] : 略号 S)、Vaidya

氏による読み (Vaidya [1960]:略号 V) を注記する。なお、先述のとおり「鈴木本」には「鈴木旧本」(略号 So) と「鈴木新本」(略号 Sn) とがあり、両者において読みが異なる場合には、それぞれの読みを区別して記す。

### 3.1 翻刻の凡例

- ・本写本において明らかな誤写と思われる箇所であっても記述に従って翻刻す。
- ・本写本の謄写版を完成させた「泉本」の該当箇所は、例えば1頁1行の場合、(I1.1) と記す。
- ・異本の異読は、フォリオ毎に記す。
- ・翻刻に際し使用した略語は以下の通りである。

[ ] 意図せず部分的に消えた文字

{ } 書写者によって意図的に消された文字

« » 書写者による〔と推定される〕行間書き入れ文字

«« »» 非書写者による〔と推定される〕行外書き入れ文字

+ 意図せず消え、判読不能な文字

\* *virāma*

' *avagraha*

| *daṇḍa*

B: 「Baroda 写本」。「Vaidya 本」において「Baroda 写本」の読みとして注記されたもの、  
或いは田村 [2006] より転載する。

CA: 「ケンブリッジ写本」。田村 [2006] による翻刻から転載する。

H: 玉代勢法雲 [1908a] による翻刻から転載する (ローマナイズ表記のため、ヴィラーマ  
とダングダを記さない)。

I: 「泉本」= Idzumi [1928a]。Iのみ行数まで記す、他は頁冒頭部のみ記す。

K: 「京都大学写本」。「泉本」による註を、[K] として表記する。

R: 「英国王立アジア協会写本」。田村 [2006] による翻刻から転載する。

S: 「鈴木本」= Suzuki & Idzumi [1934-36/1949]。「鈴木旧本」と「鈴木新本」を区別す  
るときは、それぞれ So と Sn と表記する。

T: 立正大学大崎図書館所蔵河口将来写本、「河口写本」と記す。

V: Vaidya [1960]。

### 3.2 翻刻テキスト

Folio 1 verso (H6.12-8.10; I1.1-2.9; S1.1-18; V1.11-27)

1 (I1.1) (S1.1) +++ [sarvva]<sup>(1)</sup>buddha<sup>(2)</sup>[bodhisatvebhyaḥ || ||<sup>(3)</sup> gaṇḍa]vyūhamahārṇavastotraninādito

- (4) (5) (6)  
 jīnasutānā<sup>(11.3)</sup> parṣatmaṇḍalasāgaranāmnā vyūhādikaṃ  
 2 ++<sup>(11.4)</sup> [|| su]gatasamādhyavatāraṇā<sup>(7)</sup> cintyabuddhanidarśanaṃ<sup>(8)</sup> caiva<sup>(9)</sup> |<sup>(10)</sup> dhīmatsaṃ-  
 ghāgamaṇaṃ śrāvakaṣayānugamaṇaṃ<sup>(11)</sup> ca ||<sup>(12)</sup> stuti<sup>(13)</sup> meghācintyamahābuddho-  
 3 tpādap[r]akāśanaṃ<sup>(14)</sup> sudhiyā<sup>(15)</sup> |<sup>(16)</sup> saddharmma<sup>(17)</sup> ratnasāgarasamantabhadrārthanirdeśaṃ<sup>(18)</sup>  
 ||<sup>(19)</sup> sarvva<sup>(20)</sup> tathāgatasurucirasamādhisāgara paramparāvagamāt\* |  
 4<sup>(11.9)</sup> jīnasugatasamādhisāgaraṃ<sup>(21)</sup> paramparāś<sup>(22)</sup> cānugantavyaḥ<sup>(23)</sup> ||<sup>(24)</sup> iti<sup>(25)</sup> sugatasamādhisatair  
 vimokṣasāgaraparamparābhiś ca |<sup>(26)</sup> sugatātmajena  
 5 [sudhiyā ma]ñjuśrī nāmadheyena ||<sup>(27)</sup> nirdiśatā<sup>(28)</sup> sugatānām<sup>(29)</sup> vyūham acintya<sup>(30)</sup> tathā<sup>(31)</sup>  
 jīnasutānām<sup>(32)</sup> vikriḍitair<sup>(33)</sup> bahuvidhaiḥ sphuṭa jagadanantapa-  
 6 ryyantaṃ ||<sup>(34)</sup> tasyaivaṃ<sup>(35)</sup> nirdiśato<sup>(36)</sup> daśabalatanayasya<sup>(37)</sup> bodhibalasattvāḥ<sup>(12.6)</sup> avaterur<sup>(38)</sup> viṣay-  
 odadhimatha sugatānām<sup>(39)</sup> niravaśeṣaṃ ||<sup>(12.7)</sup> teṣāṃ<sup>(40)</sup> samādhisā-  
 7 [ga]ramavakrā[ma]d<sup>(41)</sup> daśabalānubhāvena |<sup>(42)</sup> vikriḍitair<sup>(43)</sup> acintyais<sup>(44)</sup> caranti ya-  
 syānubhāvena |<sup>(45)</sup> eva<sup>(46)</sup> samāhitadhiyaste vasiṇoḥ satva sā-

注 (1) +++: HISV *om namaḥ*.<sup>(2)</sup> [sarvva]buddha[bodhisattvebhyah]: HISV *sarvabuddhabodhisatt-  
 vebhyaḥ*. || ||: IS ||. °*ninādito*; ISV °*ninādi bho*. °*sutānā*: HI °*stānām*; S °*sutānām*; V  
 °*sutānām*\* |. *parṣat*: HISV *parṣan*. ++: HISV *proktam*\*. ||: S |; V || 1 ||. °*avatāraṇā*  
*cintyabuddhanidarśanaṃ*: H °*avatrānācintyabuddhanidarśanaṃ*; I °*avatāraṇā acintyabud-  
 dhe nidarśanaṃ*; B °*avataraṇā acintyabuddhanidarśanaś*; SV °*avataraṇā*  
*acintyabuddhanidarśanaṃ*. S om. |. °*ānugamaṇaṃ*: HISV °*ānugamaṇaṃ*; B °*ānugamaṇaś*.  
 ||: S || 1 ||; V || 2 ||. *stuti*: H *sututī*. *sudhiyā*: V *sudhiyām*\*. IS om. |. *saddharmma*: H *sadharmā*:  
 ISV *saddharmā*. °*nirdeśaṃ*: HISV °*nirdeśam*\*. ||: S |; V || 3 ||. *sarvva*: HISV *sarva*:  
 °*paramparāvagamāt*\*. H °*paramparāgamāt*; I °*paramparām̐vagamāt*\*; S °*paramparāvagamāḥ*.  
 (21) *jīnasugata*: HISV *jīnasuta*. °*sāgaraṃ*: HISV °*sāgara*. *paramparāś*: HSV *paramparāś*.  
 (22) *cānugantavyaḥ*: HISV *cānugantavyāḥ*. ||: S || 2 ||; V || 4 ||. S om. |. °*mañjuśrī*: IS °*mañjuśrīr*. ||:  
 (23) S |; V || 5 ||. *nirdiśatā*: H *nirdiśtaṃ* (?); I *nirdiśr*; S *nirdiśatāṃ*. *sugatānām*: H *sngatānām*.  
 (24) *acintya*: HISV *acintyaṃ*. *jīnasutānām*: IV *jīnasutānām*\* |. *sphuṭa*: HISV *sphuṭam*. °*anantaṭa-*  
 (25) *ryyantaṃ*: HISV °*anantaṭaparyantaṃ*\*. ||: S || 3 ||; V || 6 ||. °*tanayasya*: H °*nayanasya*.  
 (26) *bodhibalasattvāḥ* *ava*: H *bodhibalasattvāḥ* *ava*: I *bodhisattvā* | *ava*: S *bodhibalasattvā* *ava*:  
 (27) V *bodhibarasattvāḥ* | *ava*. *niravaśeṣaṃ*: ISV *niravaśeṣam*\*. ||: S |; V || 7 ||. °*sā[ga]*  
 (28) *ramavakrā[ma]d*: HI °*sāgaramackrāmā*; S °*sāgaramokrāmāṭam*; V °*sāgaramokramāṭam*.  
 (29) *balānubhāvena*: H °*balānnbhāvena*. S om. |. ||: S || 4 ||; V || 8 ||. *eva*: ISV *evaṃ*. *vasiṇoḥ*: HISV  
 (30) *vasiṇaḥ*. *satva*: HISV *sattva*.

## Folio 2 recto (H8.10-10.11; I2.9-4.6; S1.18-2.13; V1.27-2.31)

- 1 g<sup>(1)</sup>aram ananta<sup>(12.10)</sup> p<sup>(2)</sup>ravicarur vinayaśatair vividhair ātmaprabhāvanaya<sup>(3)</sup>iḥ ||<sup>(12.11)</sup> na ca  
sugatapādāmūlān\* k<sup>(4)</sup>kacid<sup>(5)</sup> ap<sup>(6)</sup>i upajagm<sup>(7)</sup>uste mahāsatvāḥ |<sup>(13.1)</sup> vividhair vimokṣaviṣayair v[i]-  
harantasatrāprameya<sup>(10)</sup>iste ||<sup>(13.2)</sup> prakrāma[da]+-
- 2 ṅāpathamatha caryyā<sup>(12)</sup>m jinasutaḥ<sup>(13)</sup> sa mañjuśrī<sup>(14)</sup>r bodhisatvalalitai<sup>(15)</sup> vinaya<sup>(16)</sup>m sa-  
tvāparamabod<sup>(18)</sup>hau ||<sup>(13.4)</sup> dhanyākarāt<sup>(19)</sup> puravarād<sup>(20)</sup> anupūrvveṇā<sup>(21)</sup> sau vineyavaśād<sup>(22)</sup> |<sup>(13.5)</sup>  
vinayāsa mahājanam acintyamir<sup>(23)</sup>d[e]śe vaśitābhi<sup>(24)</sup>[h]
- 3<sup>(13.6)</sup> tatra sudhana<sup>(26)</sup>m kṛpāludharmmadhano<sup>(27)</sup> bodhaye samādāpya<sup>(28)</sup>:<sup>(13.7)</sup> kalyāṇami-  
trasāgaravatmanyavatāryya<sup>(29)</sup> kārūṇyāt\* ||<sup>(13.8)</sup> vijahāra<sup>(30)</sup> satvavinayair<sup>(31)</sup> bahubhiḥ<sup>(32)</sup>  
kṣetrārṇaveṣv<sup>(33)</sup>amitakāyaḥ |<sup>(13.9)</sup> eva<sup>(34)</sup>m vidhair upāyair<sup>(35)</sup> abhivinaya-
- 4 bhāvya<sup>(34)</sup> janakāya<sup>(35)</sup>m ||<sup>(13.10)</sup> sudhanopi<sup>(36)</sup> tad anuśāntyā<sup>(37)</sup> meghaśrisāgarā<sup>(38)</sup>m buda pramukhai<sup>(39)</sup>«h»<sup>(40)</sup>  
kalyānamitrasāgaramarāmya<sup>(41)</sup> samantabhadrānta<sup>(42)</sup>m ||<sup>(13.11)</sup> vinayan\*<sup>(43)</sup> satvasahasrān\*<sup>(44)</sup> tat<sup>(45)</sup>  
kāyāntargataḥ<sup>(46)</sup> samādhiśatair<sup>(47)</sup> vijahārāna-
- 5 ntadhiyon samaṃta<sup>(50)</sup> bhadracaryyā<sup>(51)</sup>bhimukhaḥ || ||<sup>(14.3)</sup> eva<sup>(52)</sup>m mayā śrutam<sup>(53)</sup> ekasmin<sup>(54)</sup> samaye<sup>(55)</sup>  
bhagavañ<sup>(56)</sup> chrāvastyā<sup>(57)</sup>m vi<sup>(58)</sup> harati sma ||<sup>(14.4)</sup> jetavane anāthapiṇḍadasyārāme<sup>(59)</sup> mahatā<sup>(60)</sup> vyūhe<sup>(61)</sup>  
kūṭāgāre sārddham<sup>(62)</sup> pa+[mā]-
- 6 trair<sup>(61)</sup> bodhisatvasahasraiḥ<sup>(62)</sup> samantabhadra<sup>(14.6)</sup> mañjuśribodhisatvapūrvvaṃgamair<sup>(63)</sup> yaduta |  
注 <sup>(1)</sup> ananta°: IV anantam\* |; S anantaṃ. <sup>(2)</sup> pravicarur: V pravicerur. ||; S |; || 9 ||. <sup>(3)</sup> pādāmūlān°: H  
<sup>(4)</sup> pādāmūlān.; SV <sup>(5)</sup> pādāmūlāt°. <sup>(6)</sup> k<sup>(6)</sup>kacid: HISV <sup>(7)</sup> kacid. <sup>(7)</sup> ap<sup>(7)</sup>i: HSV <sup>(8)</sup> apy. <sup>(8)</sup> upajagm<sup>(8)</sup>uste: H <sup>(9)</sup> upajagmn-  
<sup>(9)</sup>ste; V <sup>(9)</sup> apajagmuste. <sup>(10)</sup> mahāsatvāḥ: HIV <sup>(10)</sup> mahāsattvāḥ; S <sup>(10)</sup> mahāsattvā. S om. |. <sup>(11)</sup> v[i]  
<sup>(11)</sup>harantasatrāprameyaiste: H <sup>(11)</sup> viharantastarāprameyaiste; I <sup>(11)</sup> viharamstatrāprameyaiste; SV  
<sup>(12)</sup> vyaharamstatrāprameyaiste. ||: S || 5 ||; V || 10 ||. <sup>(13)</sup> prakrāma[da]+ṅāpathamadhva: I  
<sup>(14)</sup> prakrāmaddakṣiṇāpathamatha; SV <sup>(14)</sup> prakrāmīddakṣiṇāpathamatha. <sup>(15)</sup> caryyāṃ: HI <sup>(15)</sup> caryāṃ; SV  
<sup>(16)</sup> cariyāṃ. <sup>(16)</sup> jinasutaḥ sa: I <sup>(16)</sup> jinasutasya; SV <sup>(16)</sup> jinasutasya sa. <sup>(17)</sup> mañjuśrīr: I <sup>(17)</sup> mañjuśrīḥ |<sup>(13.3)</sup> sa; V  
<sup>(17)</sup> mañjuśrīḥ |. <sup>(17)</sup> bodhisatvalalitai: HISV <sup>(17)</sup> bodhisattvalalitair. <sup>(18)</sup> vinayaṃ: HISV <sup>(18)</sup> vinayan\*. <sup>(18)</sup> satvāpa-  
<sup>(19)</sup>rama°: H <sup>(19)</sup> sattvāparama°; IV <sup>(19)</sup> sattvān\* <sup>(19)</sup>parama°; S <sup>(19)</sup> sattvān <sup>(19)</sup>parama°. || S |; V || 11 ||. <sup>(20)</sup> pūrvveṇā: I  
<sup>(20)</sup> pūrvveṇā.; SV <sup>(20)</sup> pūrvveṇātha. <sup>(21)</sup> sau: V <sup>(21)</sup> so. <sup>(21)</sup> vineyavaśād: I <sup>(21)</sup> vinayavaśād; IS <sup>(21)</sup> vineyavaśād\* |; V  
<sup>(22)</sup> vineyavaśāt\* |. <sup>(23)</sup> vinayāsa: ISV <sup>(23)</sup> vinayāmāsa. <sup>(24)</sup> acintyami-rd [e] śe: ISV <sup>(24)</sup> acintyanirdeśa°. I ins. |; S  
<sup>(25)</sup> ins. || 6 ||; V ins. || 12 ||. <sup>(26)</sup> kṛpāludharmmadhano: HIS <sup>(26)</sup> kṛpālur <sup>(26)</sup>dharmmadhano; V  
<sup>(27)</sup> kṛpāludharmmadhano. :: IV |. <sup>(27)</sup> sāgaravatmanyavatāryya <sup>(27)</sup>kārūṇyāt\*: H  
<sup>(28)</sup> sāgaravatmanyavatāryya <sup>(28)</sup>kārūṇyāt; ISV <sup>(28)</sup> sāgaravartma-nyavatāryya <sup>(28)</sup>kārūṇyāt\*. || S |; V || 13 ||  
<sup>(31)</sup> satvavinayair: ISV <sup>(31)</sup> sattvavinayair. <sup>(32)</sup> bahubhiḥ: H <sup>(32)</sup> bahbhiḥ. <sup>(33)</sup> kāyaḥ |; S <sup>(33)</sup> kāya. <sup>(33)</sup> abhivinaya°: HISV  
<sup>(34)</sup> abhivinayan\*. <sup>(34)</sup> bhāvya: V <sup>(34)</sup> bhavya. <sup>(35)</sup> kāyaṃ: HISV <sup>(35)</sup> kāyam\*. || S || 7 ||; V || 14 ||. <sup>(37)</sup> sudhanopi: ISV

*sudhano* <sup>(38)</sup> 'pi. *anusāntyā*: H *anusāntya*; ISV *anusāstyā*. <sup>(39)</sup> *śāgarām*: I *śāgarām\**; SV *śāgarām*. <sup>(40)</sup>  
*buda*: H *buddha*. <sup>(41)</sup> *pramukhai* «*h*»: ISV *pramukham\**. I ins. |. <sup>(42)</sup> *śāgaramarāmya*: SV <sup>(43)</sup>  
*śāgaramārāgya*. <sup>(44)</sup> *samantabhadrāntaṃ*: H *sama-ntabhadrāntam*; ISV *samantabhadrārtham*. <sup>(45)</sup>  
 || S |, V || 15 ||. <sup>(46)</sup> *vināyan\**: S *vinā-yan*. <sup>(47)</sup> *satvasahasrān\**: HIV *sattvasahasrān\**; S *sattvasahasrān*. <sup>(48)</sup>  
*samādhiśatair*: IS *samādhiśatair\**; V *samādhiśataiḥ*. <sup>(49)</sup> IV ins. |. <sup>(50)</sup> *vijahārānantadhiyon*: I  
*vijahārānantadhiyaḥ*; SV *vijahārānantadhiyaṃ*. <sup>(51)</sup> *samaṃta*: HSV *samanta*. <sup>(52)</sup> *caryyābhi-*  
*mukhaḥ*: H *caryyābhimukhaḥ*; ISV *cariyābhimukhaḥ*. || ||: S || 8 ||; V || 16 ||. *evam*: HISV  
<sup>(55)</sup> *evam*. V ins. |. <sup>(56)</sup> *bhagavān chrāvastyāṃ*: [K]V *bhagavān\** *śrāvastyāṃ*. ||: S |. <sup>(57)</sup> *anāthapiṇḍada*:  
<sup>(59)</sup> HISV *'nāthapiṇḍada*. *mahatā vyūhe kūṭāgāre*: H *mahatā vyūhakūṭāgāre*; ISV *mahāvvyūhe*  
<sup>(60)</sup> *kūṭāgāre*. *sārdham*: HISV *sārdham*. <sup>(61)</sup> *pa+[mā]trair*: HISV *pañcamātrair*. <sup>(62)</sup> *bodhisattvasahas-*  
<sup>(63)</sup> *raiḥ*: HISV *bodhisattvasahasraiḥ*. *bodhisattvapūrvvaṃgamair yaduta* |; H  
*bodhisattvapūrvvaṃgamair yaduta* |; IS *bodhisattvapūrvvaṃgamair yaduta* |; V  
*bodhisattvapūrvvaṃgamaiḥ* | *yaduta*.

#### 4 現存諸写本間における「河口写本」の位置

「河口写本」の読みの特徴を明らかにするために、先行研究にて示された例に依拠し、本写本の同箇所について検証する。

田村 [2006] は既に「Vaidya 本 (V)」≠「英国王立アジア協会所蔵写本 (R)」=「パロウダ写本 (B)」=「ケンブリッジ大学所蔵写本 (CA)」となる異読の例を示されている。<sup>26)</sup>ここでは田村 [2006] による研究成果に「河口写本 (T)」、また、参考として「泉本 (I)」、「鈴木本 (S)」の読みも併記し、諸本間における「河口写本」の位置について検証する。下記の「RBCA 写本」は、田村 [2006] からの転載である。以下、異読がみられる箇所の下線を付す。

##### 用例1 (V1.7; RBCA=田村 [2006 : 2] ; T2a6-7; I4.8-9; S1.4)

V : *asaṅgottarajñāninā ca* | *kusumottarajñāninā ca* | *sūryottarajñāninā ca* |  
 RBCA : *asaṅgottarajñāninā ca* *bodhisattvena kusumottarajñāninā ca* *bodhisattvena*  
*sūryottarajñāninā ca* *bodhisattvena*  
 T : *asaṃgottarajñāninā ca* | *bodhisattvena* | *kusumottarajñāninā ca* |  
*sūryottarajñāninā ca*  
 I : *asaṅgottarajñāninā ca* | *kusumottarajñāninā ca* | *sūryottarajñāninā ca* |  
 S : *asaṅgottarajñāninā ca* | *kusumottarajñāninā ca* | *sūryottarajñāninā ca* |

この箇所では、菩薩名の後に続けて *bodhisattvena* を付す系統と付さない系統とがあることがわかる。「V 本」、「I 本」と「S 本」は *bodhisattvena* を付さず、「RBCA 写本」は共通して *bod-*

*hisattvena* を付す。「T本」は中間的であり、一箇所のみ *bodhisattvena* を付す。簡略化すると、 $V=I=S (\neq T) \neq RBCA$  となる。

用例2 (V2.5-2.6; RBCA= 田村 [2006 : 3] ; T4a2-3; I5.8-10; S2.22-23)

V : *jñānāvabhāsatejasā ca | samantaśrītejasā ca | samantaprabhatejasā ca | samantaprabhaśrītejasā ca bodhisattvena mahāsattvena ||*

RBCA : *jñānāvabhāsatejasā ca samantaśrītejasā ca samantaprabhatejasā ca bodhisattvena mahāsattvena*

T : *jñānāvabhāsatejasā ca | sa[ma]ntaśrītejasā ca | samantaprabhatejasā ca | samantaprabhaśrītejasā ca | bodhisattvena mahāsattvena || ||*

I : *jñānāvabhāsatejasā ca | samantaśrītejasā ca | samantaprabhatejasā ca | samantaprabhaśrītejasā ca | bodhisattvena mahāsattvena || ||*

S : *jñānāvabhāsatejasā ca | samantaśrītejasā ca | samantaprabhatejasā ca | samantaprabhaśrītejasā ca bodhisattvena mahāsattvena ||*

この箇所では、*samantaprabhaśrītejasā ca* を付すか否かで系統が分かれる。「V本」は注において「B写本」に *samantaprabhaśrītejasā ca* が欠けることを記している。「田村本」によると、*samantaprabhatejasā ca | samantaprabhaśrītejasā ca* にあたる箇所の蔵訳は *kun nas dpal gyi gzi brjid dang / kun nas 'od dpal gzi brjid dang /* とあり、 $V=T=I=S$  に相応し、さらに漢訳では『四十華嚴』のみ「普賢吉祥光菩薩。普賢焰光菩薩」(『大正蔵』 vol.10, No.293, 661a19) としてこれに相応するといえる。簡略化すると、 $V=T=I=S \neq RBCA$  となる。

用例3 (V2.10; RBCA= 田村 [2006 : 5] ; T2b5; I6.7-8; S3.2-3)

V : *avalokitanetreṇa ca utpalanetreṇa ca*

RBCA : *utpalanetreṇa ca*

T : *avalokitanetreṇa ca | utpalanetreṇa ca |*

I : *avalokitanetreṇa ca | utpalanetreṇa ca |*

S : *avalokitanetreṇa ca | utpalanetreṇa ca |*

この箇所では、*avalokitanetreṇa ca* を付すか否かで系統が分かれる。「RBCA写本」には *avalokitanetreṇa ca* を欠くわけである。「V本」は、同文が「B写本」に欠けることを注で指摘している。簡略化すると  $V=T=I=S \neq RBCA$  となる。なお、「田村本」をみても蔵訳・漢訳には *avalokitanetreṇa ca* にあたるものがない。

## 用例4 (V2.23; RBCA= 田村 [2006 : 8] ; T3a4; I8.10-11; S3.18)

V : jñānaketunā ca | dharmaketunā ca |  
 RBCA : dharmaketunā ca  
 T : jñānaketunā ca | dharmaketunā ca  
 I : jñānaketunā ca | dharmaketunā ca |  
 S : jñānaketunā ca | dharmaketunā ca |

この箇所では、jñānaketunā ca を付すか否かで系統が分かれる。田村 [2006] によると、B本には同箇所を欠くようであるが、「V本」はその点を注記していない。このことは「V本」の「B本」に関する注記も検証が必要であることを示しているといえる。簡略化すると V=T=I=S ≠ RBCA となる。なお、「田村本」によると、jñānaketunā ca について蔵訳では *ye shes dpal dang* / とあり、漢訳では『六十華嚴』に「智幢菩薩」、『八十華嚴』に「智慧幢菩薩」、『四十華嚴』には「智聚菩薩」とある。

## 用例5 (V3.20; RBCA= 田村 [2006 : 14] ; T3b7; I12.4-5; S4.16-17)

V : pranidhānābhiniryātair  
 RBCA : pranidhānairyātaiḥ  
 T : pranidhānābhiniryātair  
 I : pranidhānābhiniryātair  
 S : pranidhānābhiniryātair

この箇所では、上記下線部において、V=T=I=S ≠ RBCA と系統が分かれる。

## 用例6 (V3.21; RBCA= 田村 [2006 : 14] ; T4a1; I12.6; VS4.18)

V : viśuddhaiḥ  
 RBCA : vibuddhaiḥ  
 T : viśuddhais  
 I : viśuddhaiḥ  
 S : viśuddhaiḥ

この箇所では I 本は viśuddhaiḥ をとりつつも、「P本」には vibuddhaiḥ とあるとの註を付している。ここでも V=T=I=S ≠ RBCA と系統が分かれることが知られる。

## 用例7 (V3.26; RBCA= 田村 [2006 : 15] ; T4a3; I13.2)

V : raśmijālaspharṇatayā ||  
 RBCA : raśmijālaspharaṇaiḥ

T : *rasmijāla*[spā]/*«spha»raṇatayā*

I : *raśmijālasa*para*ṇatayā* ||

S : *raśmijālas*pha*rṇatayā*

この箇所について、「T本」では。 *spāraṇatayā* と書写した上で、。 *spharaṇatayā* と書写者自身が修正している。この箇所について「I本」には誤読（或いは誤記）がみられる。RBCAのみが、男性名詞・具格・複数形をとり、この点で V=T=I=S≠RBCA となる。

用例8 (V4.10; RBCA= 田村 [2006 : 20] ; T4b3; I15.2; S5.13)

V : *pūrvabuddhasukṛtakuśalamūlatayā*

RBCA : *pūrvasukṛtakuśalamūlatayā*

T : *pūrvasukṛtakuśalamūlatayā*

I : *pūrvasukṛtakuśalamūlatayā*

S : *pūrvabuddhasukṛtakuśalamūlatayā*

この箇所では、上記下線部の通り、*buddha* の語を記すか否かで系統が分かれる。「I本」は、「K本（京大所蔵・榊将来写本）」には *pūrvabuddhasukṛta* とあると註を付している。「S本」ではこの読みが採用されたことになる。このことは「S本」が必ずしも「I本」の焼き直しではないことを意味する。V=S≠T=I=RBCA となる

用例9 (V4.13; RBCA= 田村 [2006 : 21] ; T4b5; I15.7; S5.17)

V : *pratibodha*

RBCA : *pratibodhi*

T : *pratibodha*

I : *pratibodha*

S : *pratibodha*

この箇所について、「I本」は、「P本」には *pratibodhi* とあるとの註を付す。V=T=I=S≠RBCA となる。

用例10 (V4.15; RBCA= 田村 [2006 : 21] ; T4b6; I15.9-10; S5.19)

V : *dharmanirdeśa*

RBCA : *dhramadeśa*

T : *dharmmanirdeśa*

I : *dharmmanirdeśa*

S : *dharmanirdeśa*

この箇所では、「V 本」は「B 本」の異読を記していない。V=T=I=S≠RBCA となる。

用例11 (V4.16; RBCA= 田村 [2006 : 22] ; T4b7; I16.1; S5.20)

V : *ca samdarśayet\** |

RBCA : *samdarśayet*

T : *ca darśayet\** |

I : *ca samdarśayet\** |

S : *ca samdarśayet\** |

この箇所について「RBCA 写本」では、一連の *ca samdarśayet* はすべて *ca* を欠いている。

「T 本」は接頭辞 *saṃ* を欠いているが、*ca* を付すか否かという点においては、V=T=I=S≠RBCA となる。

用例12 (V5.15; RBCA= 田村 [2006 : 31] ; T6a1-2; I20.4-5; S.7.5-6)

V : *maṇiratnaraśmijālāvabhāsavyūhā*

RBCA : *maṇiraśmijālāvabhāsavyūhāḥ*

T : *maṇiratnaraśmijālāvabhāsavyūhāḥ* |

I : *maṇiratnaraśmijālāvabhāsavyūhāḥ* |

S : *maṇiratnaraśmajālāvabhāsavyūhā*

この箇所では、*ratna* を挿入するか否かという点で系統が分かれる。語尾変化を考慮しないならば、V=T=I=S≠RBCA となる。

## 5 小 結

本稿で翻刻を示した「河口写本 (T)」の冒頭部について、既に翻刻を行っていた玉代勢法雲氏、泉芳璟博士の研究成果を参照すると、両者と「河口写本」との間に若干の読み違いの存在が認められる。

また、現存諸写本間における「河口写本」の位置について、「田村本」などとの対比を行い検証した結果、概して「河口写本」は「英国王立アジア協会写本 (R)」、「Baroda 写本 (B)」、「ケンブリッジ大学写本 (CA)」とは異なる読みを有していることが明らかとなった。先の用例7については「泉本 (I)」には誤読或いは誤記がみられる。用例8では、「泉本」は「河口写本」を忠実に書写しているが、「鈴木本 (S)」では「榊写本 (K)」の読みを採用していた。これまで遡ることができる上限であった「泉本」が「河口写本」とは異なる読みを有する箇所もあり、それは「泉本」に記載された情報のみでは知りうるできないものもある。この点において「河口写本」の再発見は、「泉本」の読みを確認するためにその存在が有する意義があるとい

えよう。

このように、本稿で検証した例に関する限り、「河口写本」は「RBCA 写本」の伝承とは異なった系統を伝えるものといえる。ただし、「河口写本」と「RBCA 写本」間における差とは、その読みに全く異なった解釈を与えるまでのものではないと推定される。

なお、先述したように、玉代勢法雲氏は、1908年の時点で本写本冒頭部の翻刻と和訳を公表し、写本冒頭部の「帰敬序」を全て翻刻している。しかしながら、現状では「河口写本」の第一葉裏面左側の一部に破損（焼失か）が見られ、それに伴い一部の文字が判読できない状態であるが、玉代勢氏は破損により失われた箇所<sup>27)</sup>の翻刻を行っている。「河口写本」における物理的破損は、玉代勢氏による調査の後に被ったものと推定される。

## 注

- 1) 鈴木博士は、1923年の震災で焼失したと述べている。Suzuki & Idzumi [1934-36 : note [p.1]] を参照。
- 2) 本写本について筆者は既に、庄司 [2010]、[2013]、Shōji [2012]、[2013] にて言及した。また、その来歴に関しては、立正大学大崎図書館 [2013:81-85] に、本写本の書誌については、立正大学大崎図書館 [2013:31] に詳しく述べられている。河口慧海の甥である河口正 (1918-1962) 氏の『河口慧海—日本最初のチベット入国者』(春秋社、1961年、2000年に新版出版) 中の東西文化交流研究所 (立正大学内) に譲渡されたという「ネパール語写本一部 (四〇一葉)」（河口正 [2000 : 226-227]）が、本写本を指すものと考えられる (本写本は全四〇二葉あるが、その中の一葉は本文紙四〇一葉に付された白紙である)。東西文化交流研究所における河口慧海旧蔵資料に関する言及は極めて少ない。同研究所が発行した『文化交流』の他には、『ネパール・ヒマラヤ探検記録』に「梵文經典・経板346部 (東大、東洋文庫、東西文化交流研究所、東北大学)」とある (日高&川喜田 [1967 : 2]) が、これは、河口正前掲書の初版本 (1961年刊) によったものと推定される。
- 3) 玉代勢 [1908a/b] を参照。
- 4) 泉 [1909b] を参照。
- 5) 泉 [1928a] を参照。
- 6) Suzuki & Idzumi [1934-36] を参照。
- 7) Suzuki & Idzumi [1949] を参照。
- 8) Vaidya [1960] を参照。
- 9) 長谷岡 [1965] を参照。
- 10) 庄司 [2013] を参照。同様の例として、既に梵本『八千頌般若経』におけるテキストの問題について、辛嶋静志博士が指摘されている (Karashima [2013])。
- 11) 庄司 [2013:845-846] を参照。なお、田村智淳氏を研究代表者としてまとめられた科研費研究成果報告書『華嚴経入法界品梵文原典の批判的校訂と現代語訳にもとづく華嚴経の新解釈』によると、研究期間中に入手した写本は、合計28種であるという (田村 [2006:はしがき])。また同報告書で用いられたテキストは「ヴァイディヤ本 (V)」にもとづきながら、「鈴木本 (S)」、そして写本として「英国王立アジア協会本 (R)」、「Baroda 写本 (B)」、そして「ケンブリッジ大学写本 (CA)」である (田村 [2006 : 序] を参照)。
- 12) 田村 [2006] を参照。
- 13) 田村氏によると、写本の校訂を進める中で、*Gaṇḍavyūha* 各写本間の異読は、語句や文章の順序の相違であり、既刊の校訂本の翻訳不可能箇所に関する新しい解釈は、第1章による限り認められないとも述べられてい

- る(田村 [2006: 序])。
- 14) 堀 [2012]、[2013] に詳しい。
- 15) これは本来「鈴木・泉本」と記すべきであるが、本稿では「泉本」との混同を避けるために、単に「鈴木本」と表記する。
- 16) 「なお、泉芳環博士は1928年時点で既に発見、出版された「梵文佛教經典」を、その出版時期により三期(第1期: 発見～1880年、第2期: ～1900年、第3期: それ以後)に分けて提示、概観されている(泉 [1928b])。本写本の出版は、この分類では第3期に含まれる。また博士は同論末尾において、「未だ梵文佛教典の出版せらるべくして出版されないものに、Gaṇḍavyūhaあり、Tathāgataguhyakaあり、Pañcaviṃśatisāhasrikāあり、Suvikrāntavikrāmīあり、Pañcarakṣāあり、又従来の公刊に訂正を要すべきものも多々ある。これらは各方面で整理せられ、出版準備中のやうである」とされ、さらに *Gaṇḍavyūha* について、「東晋佛陀跋陀羅訳、大方広佛華嚴經の入法界品、唐実又難陀訳、同経同品、唐般若訳、同経、西秦聖堅訳、羅摩伽経に相当す。予梵本を謄写して所持せり。これは河口慧海氏将来の本を京都帝国大学所蔵本と校訂せしものなり」と注記されている(泉 [1928b: 107-108])。
- 17) 前注2)を参照。
- 18) 「鈴木本」の Note によれば、河口氏将来の本写本と、榊亮三郎博士将来写本の校合は、1907-14年の間に泉博士によってなされたという(Suzuki & Idzumi [1934: Note p.1])。
- 19) 泉 [1928a]の序文を参照。須佐晋龍氏は「華嚴經十地品の研究」において、「華嚴經入法界品の梵本に就いては曩に泉教授東京京都の帝大本によりて謄本を作られ、予これを再謄寫して副本二十部を作り、學者の間に頒てり。其の後諸方面より頒布を希望せらるゝも今は殘本なきを遺憾とす。但し速からず泉教授が更にローヤルアジア學會本ケンブリッジ本并にパリ本等を取載したる校訂本を出版せらるゝ筈なり」と述べている通り、これを数部コピーして関係者に配布した(須佐 [1930: 63-64 (note 1)]、高崎 [1983: 9]を参照)。久野芳隆(1898-1944)氏は、1930年に発表した「華嚴經の成立問題」において泉本を使用しており、「私のは泉芳環氏の未定稿梵本 Gaṇḍavyūha P.252を依用したのである。遙かにこの際同氏の勞を謝する次第である」と述べている(久野 [1930: 113])。泉本について山田龍城(1895-1979)博士は、「河口将来本を底本とし榊博士謄写本等により校異を行う」と述べている(山田 [1959: 91, 注(4)])。眞田有美氏は、「この本は東京大學所蔵河口慧海師將來本中の一書を底本とし京都大學所蔵本、榊博士謄寫本、Bendall 出版の *Çikṣāsamuccaya* 引用のもの、渡邊海旭師校訂の普賢行願讚等を比較校訂した未定稿本である。尚、此書には以上各本の校異が加えられている」(眞田 [1959: 56-57])。
- 20) 校訂テキストの刊行以前は、当然のことながら、写本を用いての *Gaṇḍavyūha* 研究が進められていた。例えば、干潟龍祥(1892-1991)博士によると、ボロブドゥール第2廻廊から第4廻廊のレリーフと *Gaṇḍavyūha* との比定を1920年に行ったオランダの Nicolaas Johannes Krom (1883-1945) は「当時梵文 text の出版されたものはなく、辛うじて他の學者の抄解によつたものであるから、詳細を比較検討することはできなかつた」とし、また Krom の後に残された部分の比定を1929年に行った Frederik David Kan Bosch (1887-1967) については、「Paris で Gaṇḍavyūha の text を見たからかなりによく比定したのであろう」と述べている(干潟 [1960])。パリの国立公文書館には9種の *Gaṇḍavyūha* の紙写本が収められている(眞田 [1959: 56]を参照)。
- ところで、*Gaṇḍavyūha* の梵文校訂テキストが公表される以前にして、またボロブドゥール第2～第4廻廊と *Gaṇḍavyūha* との比定がなされたわずか数年後に市井人として同遺蹟を訪れた古田中正彦(1881-1965)氏は、その南洋旅行記である『南十字星』の中で「進んでブルブドールの佛蹟に行く小高い丘上に石塔群集して、一大圓塊を成したるさまは偉觀とも壯觀とも言ひやうが無い。寧ろ恐怖を誘ふ塔の集團だ。今しも夕陽が此の高い大集團の石塔の上に映えて、黒味を帯びた石の色が古色に物凄しい。人の力か、佛の力か、何の時代に之れ丈けのものを造り上げたか、昔の力の威力を恐れずに居られない、而して信仰の強さも思はれる。偉大な

る藝術品だ。幾十の塔の中に何百か何千あの石佛が置いてあつて、外側の周囲の石壁には釋尊の一代記が繪になつて、彫刻してある。人の顔の表情なども巧みなものだ」と述べており(古田中 [1934:120-121])、当時の市井人には未だ同遺蹟のレリーフが *Gaṇḍavyūha* (華嚴經) の一部を示すものとの認識はなかつたものと思われる。他にも同氏は「パレンパノの佛蹟を訪ふ。石を積み上げた高い塔が三ツ四ツある、半壞れた石の跡を見て昔日の壯大さを想像する。石には澤山の佛像や動物や色々のものが彫刻してある。中には變な繪もある」とも記し(同 [1934:119])、同書の口絵にはボロブドゥール遺蹟の写真二点を掲載している(同行の中村觀治氏撮影)。

21) 「鈴木本」の冒頭にはそこで用いた写本について、次のように記している。

1. The palm-leaf MS (to be designated in future references, (A) in the Library of the Royal Asiatic Society, London, a rotograph copy of which was obtained by Prof. D. T. Suzuki in 1930.

2-3. The two paper MSS (C1 and C2) in the Library of Cambridge University, Cambridge, England, a rotograph copy of each of which was obtained by Prof. D. T. Suzuki in 1930.

4. A paper MS (P) belonging to the Bibliothèque Nationale, Paris, a photograph copy of which Prof. D. T. Suzuki took during his stay in Paris in 1908.

5. A paper MS (T) of the library of the Tokyo Imperial university.

6. A paper MS (K) of the library of the Kyoto Imperial university.

The last two MSS brought over to Japan were hand-copied and collated by Prof. H. Idzumi in 1907-14. The MS thus prepared by him was the basis of the mimeograph copies which were made by Prof. Shinryu Susa at request of Prof. D. T. Suzuki in 1929, and about twenty of these copies were distributed among their friends. For this, thanks are due to the compiler and owner of the MS Prof. H. Idzumi (Suzuki & Idzumi [1934: Note [p.1]]).

以上の通り、そこで用いられた写本は① the Library of the Royal Asiatic Society、②・③ the Library of Cambridge University、④ the Bibliothèque Nationale、⑤ the library of the Tokyo Imperial university、⑥ the Kyoto Imperial university である。この中、⑤が河口将来写本、⑥は榊将来写本である。この写本⑤が、立正大学より発見された。

また、この初版本の前半部である Part I-II の刊行に際して「此經の校訂に際しては、ロンドン亜細亞協會所蔵の貝葉写本一種、ケムブリッジ大学の紙葉写本二種、巴里国民図書館所蔵の紙葉写本一種、及び東京・京都帝大所蔵の紙葉写本各一種、合計六種の写本が用いられている。而して其中亜細亞協會の貝葉写本を主たる底本としている。鈴木大拙氏は既に早く滞欧中より此梵文の刊行を志し、渡邊海旭氏と相謀る所があつたが、其後関東大震災の際、渡邊氏の書入済の写本が灰燼に帰したるを知り、益々出版の急なるを思ふに至つた。時偶々泉芳璟氏の許に、東大・京大写本を校合したるコッピイあるを知つて、漸く出版の機運熟し、梵文の校合には泉氏が主として之に当たり、今前半分が刊行せられたのである」(大谷学会 [1935:169-170]) との記事がある。

22) 改訂本の Note 末尾に “It is with great grief to report the death of Professor Hokei Idzumi which took place in 1947. The co-editor takes this opportunity to express his appreciation of all that the late Sanskrit scholar did for the publication of the present text.” と鈴木大拙博士が記すように、改訂版出版前に泉博士は没している。

23) この写本は、61.5cm × 27.2cm、一葉9行体、全218葉から成る (No.13208)。写本の概要は Vaidya [1960: IX-X] を参照。

24) Vaidya [1960: VI-XI] 参照。

25) 「帰敬序」との呼称は、玉代勢法雲氏によるもので、氏が「此經開卷第一に於て支那四譯(省略)に全く之

れ無き歸敬序又は目録やうのものあり」とされるものである(玉代勢 [1908a: 6])。

26) 田村 [2006] を参照。

27) 現在は図書館より専門業者に補修が委託され補修済となっている。立正大学大崎図書館 [2013:118] 参照。

※本稿中の略号は、「3.1 翻刻の凡例」を参照。

## 参考文献

泉芳璟

[1909a] 「梵字の上の宗教的意義」『精神界』9(1), pp.15-21, 同(3), pp.20-23, 同(11), pp.14-17.

[1909b] 「梵文普賢行願讃の研究」『無盡燈』14(2), pp.33-47, 同(5), pp.25-39.

[1910] 「梵語はなし艸」『無盡燈』15(6), pp.46-49.

[1928a] 『Gaṇḍa-vyūha』[京都] (全1488p).

[1928b] 「梵文佛教經典概観」『宗教研究特輯：最近宗教研究思潮』pp.73-108.

[1929] 「梵文普賢行願讃」『大谷学報』10(2) pp.152-208.

大谷学会

[1935] [新刊紹介] 「D.T.Suzuki, & H.Idzumi (Editors) The Gaṇḍa-vyūha sūtra (Pts. I & II) Kyoto, 1934」  
『大谷学報』16(2), pp.169-170.

河口正

[1961] 『河口慧海：日本最初のチベット入国者』春秋社 東京 (2000年、新版).

久野芳隆

[1930] 「華嚴經の成立問題一(特に入法界品に就て)一」『宗教研究』新7(2), pp.94-100.

古田中正彦

[1934] 『南十字星：南洋紀行』アトリエ社 東京.

眞田有美

[1959] 「華嚴經の梵本に就て」『仏教学研究』16/17, pp.47-69.

庄司史生

[2010] 「河口慧海請来文献」『旅する本～立正大学所蔵河口慧海コレクション～』(立正大学大崎図書館編『立正大学大崎図書館今昔蔵書選』)

[2013] 「立正大学大崎図書館所蔵・河口慧海請来梵文写本『ガンダ・ヴューハ』に関する予備的調査報告」  
『伊藤瑞嗣博士古稀記念論文集：法華仏教と関係諸文化の研究』山喜房佛書林 pp.837-846.

須佐晋龍

[1930] 「華嚴經十地品の研究」『現代仏教』7(69), pp.60-75.

高崎直道

[1983] 「華嚴思想の展開」『華嚴思想：講座・大乘仏教 第3巻』春秋社, pp. 1-44.

玉代勢法雲

[1908a] 「梵本華嚴經の研究」『無盡燈』13(5), pp. 2-24.

[1908b] 「梵本華嚴經の研究(承前)」『無盡燈』13(8), pp.11-27.

田村智淳

[2006] [研究代表者]『華嚴經入法界品梵文原典の批判的校訂と現代語訳にもとづく華嚴經の新解釈』(科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書:平成14-17年度)課題番号:14510026 [宮崎]

長谷岡一也

[1965] 「Vaidya 本 Gaṇḍa-vyūha について」『印度学仏教学研究』13(1), pp. (52) - (55).

干潟龍祥

[1960] 「Barabudur 大塔廻廊の浮彫と華嚴經入法界品」『印度学仏教学研究』8(1), pp.366-360.

日高信六郎&川喜田二郎

[1967] [編著]『ネパール・ヒマラヤ探検記録：ネパールと日本 1899=1966』講談社.

堀伸一郎

[2012] 「『大方広華嚴經』一題名とその原語」GBS 実行委員会編『論集華嚴文化の潮流』（『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集』10）法藏館 pp.10-21.

[2013] 「華嚴經原典への歴史—サンスクリット写本断片研究の意義」『智慧／世界／ことば：大乘仏典 I』（シリーズ大乘仏教第4巻）春秋社 pp.183-211

山田龍城

[1959] 『梵語佛典の諸文献』平楽寺書店 京都.

立正大学大崎図書館

[2013] [編]『立正大学大崎図書館所蔵 河口慧海請来資料解題目録』立正大学情報メディアセンター.

Fontein, Jan

[2012] *Entering the Dharmadhatu : a study of the Gaṇḍavyūha reliefs of Borobudur, (Studies in Asian art and archaeology, vol. 26)*, Leiden; Boston: Brill.

Karashima, Seishi

[2013] "On the "Missing" Portion in the Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā," *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University*, 16, pp.189-192.

Matsunami, Seiren

[1965] *A catalogue of the Sanskrit manuscripts in the Tokyo University Library*, Suzuki Research Foundation.

Mitra, Rājendralāla

[1882] *The Sanskrit Buddhist literature of Nepal*, Calcutta: Asiatic Society of Bengal.

Nakamura, Hajime

[1980] *Indian Buddhism : a survey with bibliographical notes*, Hirakata: Kansai Univ. of Foreign Studies Publication.

Shōji, Fumio

[2012] "Newly Found Literatures Owned by Ekai Kawaguchi Kept in the Risshō University Library," *Journal of Indian Buddhist Studies*, 60(3), pp. (159)-(164).

[2013] "The archives of Ekai Kawaguchi at Rissho University Library," *Universal and International Nature of the Lotus Sutra*. The Rissho University Executive Committee for the Seventh International Conference on the Lotus Sutra, pp.85-100.

Suzuki, Daisetz Teitaro & Idzumi, Hokei

[1934] *The Gandavyuha sutra (part I and II)*, Kyoto: Sanskrit Buddhist Texts Pub. Society

[1935] *The Gandavyuha sutra (part III)*, Kyoto: Sanskrit Buddhist Texts Pub. Society

[1936] *The Gandavyuha sutra (part IV)*, Kyoto: Sanskrit Buddhist Texts Pub. Society

[1949] [New rev. ed.] *The Gandavyuha sutra (part I-IV)*, Kyoto: The Society for the Publication of Sacred Books of the World.

Vaidya, Paraśurāma Lakshmaṇa

[1960] *Gaṇḍavyūhasūtram* (*Buddhist Sanskrit texts ; no. 5*), Darbhanga: Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.

〈キーワード〉 *Gaṇḍavyūha*、『華嚴經入法界品』、河口慧海